

## 被差別部落当事者による自己表現に関する研究

広島大学大学院教育学研究科 教育学習科学専攻  
教科教育学分野 国語文化教育学領域 後藤田 和

### 【論文の構成】

#### 序章

- 第一節 研究の目的
- 第二節 研究の方法
- 第三節 論文構成のねらい、および研究の対象

#### 第一部 土方鉄に見る表現と運動

##### 第一章 運動としての詩作、自己表現としての俳句

- 第一節 『地ぞこからのうたごえ』に見る運動家としての表現
- 第二節 『土方鉄句集 よき日のために』に見る結核療養者としての表現
- 第三節 『土方鉄句集 よき日のために』に見る自己表現の模索
- 第四節 運動と自己表現の距離①

##### 第二章 〈歪み〉を描く文体の獲得 ―小説「地下茎」論―

- 第一節 問題の所在
- 第二節 初出連載における文体の獲得
- 第三節 部落民の〈歪み〉を描く文体
- 第四節 土方鉄の小説観と野間宏の小説観

##### 第三章 文体の獲得 ―小説『地下茎』論―

- 第一節 部落解放運動と演劇
- 第二節 部落を想起させる表現手法
- 第三節 運動が求める表現
- 第四節 運動と自己表現の距離②

##### 第四章 書くことによる自己生成過程 ―小説「妣の闇」論―

- 第一節 文学的方法の結実
- 第二節 自己生成過程① ―詩「病床断片 I・II」と療養日記―
- 第三節 自己生成過程② ―療養日記と「妣の闇」―
- 第四節 「意識の流れ」と複数化する語り手
- 第五節 「書くこと」への使命感 ―運動の腐敗を嘆く主体―

#### 第二部 女性と識字

##### 第五章 一九五〇年代前半の部落女性の表現 ―重岡洋子の小説と岡田ます枝の詩―

- 第一節 問題の所在
- 第二節 一九五〇年代前半の部落女性の立ち位置
- 第三節 重岡洋子「日蔭」とその評価
- 第四節 岡田ます枝の詩に見る等身大の部落女性像
- 第五節 新たな創造の可能性

## 第六章 一九六〇年代の部落女性の表現 一下原温子の詩一

### 第一節 問題の所在

### 第二節 一九六〇年代の部落女性の立ち位置

### 第三節 住井すゑ『橋のない川』で描かれる部落女性像

### 第四節 下原温子という詩人

### 第五節 男性視点の内面化を揺らがせる表現

## 第七章 一九七〇年代の部落女性の表現 一「部落解放文学賞」詩部門の問題一

### 第一節 問題の所在

### 第二節 一九七〇年代の部落女性の立ち位置

### 第三節 「部落解放文学賞」について

### 第四節 識字学習者による表現の可能性 一第一回、第二回入選作の分析一

### 第五節 運動が求める部落女性像からずれる表現

## 第三部 部落解放運動と公共性

### 第八章 部落解放運動の分裂と文学・文化活動

#### 第一節 『部落』誌における部落解放運動と文学をめぐる論争

#### 第二節 同和対策審議会答申をめぐる運動の分裂と文学・文化活動の位置づけ

#### 第三節 政争の具としての表現 一映画作品を中心に一

#### 第四節 問い直される部落解放運動の公共性

### 第九章 部落解放運動と文学・文化活動をめぐる「ニーズ解釈の政治」

#### 第一節 問題の所在

#### 第二節 「公共性」論と「ニーズ解釈の政治」

#### 第三節 部落解放運動における「ニーズ解釈の政治」

#### 第四節 部落解放運動における文学・文化活動という「ニーズ」

## 結章 研究の総括

### 第一節 研究のまとめ

### 第二節 公共性を問い直す被差別部落当事者による自己表現

### 第三節 成果と課題

## 参考引用文献及びURL

## 謝辞

## 【要約】

本論文は、被差別部落当事者による表現活動について、その歴史の一端を掘り起こし、そこに蓄積されてきた作品や表現者たちの可能性について検討するものである。この作業を通じて、これまで顧みられることのなかった被差別部落当事者たちがどのように部落と向き合い、差別と向き合い、自己を向き合ったのかを明らかにすることを最大の目的とする。

従来の部落問題をめぐる研究では、社会運動全般の中での部落解放運動を対象とした経験社会学的研究や部落の起源を中心とする部落史、部落解放運動史といった歴史学の分野に関する研究に力点が置かれてきた。特に歴史学の領域における黒川みどりの研究<sup>1</sup>では、表象論を取り入れつつ、人種主義と部落民のアイデンティティを相互に関連付けて近現代の部落問題の歴史を明治期から現代までという超時代的なスパンでとらえなおし、部落問題だけでなく、さまざまなマイノリティ研究と結びつけながら詳細に論じている。部落問題を取り上げること自体が差別解消の妨げになる、という論調が同和対策事業による被差別部落における住環境の改善などによって広がりを見せる中で、それでもなお、部落問題を正面から議論しようとする黒川の姿勢は示唆的である。

一方、部落問題を文学の視座から総体的に論じた研究は、梅沢利彦・山岸蒿・平野栄久著『文学の中の被差別部落像 戦前篇・戦後篇』（明治書店、1980・1982）や渡部直己『日本近代文学と〈差別〉』（太田出版、1994）、秦重雄『挑発ある文学史 誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』（かもがわ出版、2011）および「戦後部落問題文芸と研究の到達点」（部落問題研究所編『部落問題解決過程の研究 2巻 教育・思想文化篇』部落問題研究所出版部、2011）など、一定の蓄積がなされている。

これらの先行研究で主に対象とされてきたのは、島崎藤村や野間宏をはじめ、被差別部落に生まれ育ったわけではない作家による作品群であった。それは藤範晃が「殊に奇異に感ずることは、淋しい諦めの底に眠ってゐる時は止むを得ないとして、その時期を脱した黎明期以後に於て、深刻な苦悶と苦闘とを續けつゝあり乍ら、これに對する何等の藝術的表現が被差別者のうちからなされなかつた・それほど、餘裕が無かつたとも言へやう。表現よりも戦いであつたのであらう」<sup>2</sup>と指摘しているように、戦前においては量においても質においても、「被差別部落当事者」によって部落や自己を表現することが困難であったことが示されている。

そうした状況はアジア太平洋戦争が終戦を迎え、部落解放運動の再建とともに、同時代的に盛り上がりを見せたサークル文化運動に触発されながら、「被差別部落当事者」が自己を表現し、部落の問題や差別の問題を問い直そうとするように変化する。1950年代後半になると、部落解放運動の中でも（教宣や運動促進のためではあるが）文化活動を重視しようとする動きが活発になっていった。

---

<sup>1</sup> 黒川みどり『創られた「人種」——部落差別と人種主義(レイシズム)——』（有志舎、2016）

<sup>2</sup> 藤範晃「部落解放問題と文芸」（『融和事業研究』第三輯、1929）

しかし、部落問題を扱った文学作品に関する研究において、主に対象とされてきた文学作品は、島崎藤村の『破戒』を筆頭に大西巨人『神聖喜劇』、野間宏『青年の環』、住井すゑ『橋のない川』、そして中上健次の諸作品であった。ここに課題が指摘できる。つまり、一般的に認知される著名な作家にばかり議論が集中することによって、そこから零れ落ちてしまった「被差別部落当事者」たちの表現が研究の対象として扱われてこなかったのである。

本論文で扱う「被差別部落当事者」とは、分析の対象とする表現者だけではなく、彼ら／彼女らと関わりをもったり、彼ら／彼女らの表現を受け取ったりした人々をも射程に含めた対象であることを明記しておく。

むろん、その場合において先行研究の蓄積が豊富な野間宏や住井すゑ、中上健次といった作家たちも「被差別部落当事者」であることに違いはない。ただし、ここで強調しておきたいのは、本論文で対象とする「被差別部落当事者」が「作家」として活動した人々だけではない、という点である。彼ら／彼女らは被差別部落と向き合いながら自己や部落問題を見つめ直し、自己を表現することによって部落を問い直そうとした書き手である。そういった書き手の声に耳を傾けることで、既存の枠組みを再構築し、新たな表現の可能性を提示できると考えている。また、本論文における「自己表現」について、論者の認識を示す。「自己表現」は辞書的に説明すれば、自分の内にあるものを別の形にして外部化することを意味する。そこにはもちろん日常会話なども含まれるわけだが、本論文では特に、自分の考えや感情などを反映させた作品を作ること、つまり文学作品を主な分析の対象として、そこで「自己表現」がどのように行われているのかについて追究していく。もちろんその際、文学作品という形で表現することができなかつた、あるいは表現しなかつた被差別部落当事者の存在も念頭に入れつつ、被差別部落当事者が自己の体験や考えをいかに文学作品へと投影していったのかに注目する。特に本論文第七章で対象としている識字学級に通って文字を学びながら表現行為を行った部落女性たちに見られることであるが、被差別部落当事者にとって「書く」という行為それ自体がさまざまな要因で容易にできなかつた。そうした被差別部落当事者による表現活動には自己の体験や経験に根差した表現が多くを占める。本論文では小説や詩、戯曲といった文学作品を主な研究対象としているが、そうした文学作品には少なからず作者である被差別部落当事者による体験や経験に根差した表現を読み取ることができる。したがって、対象とする被差別部落当事者による文学表現から読み取ることのできる彼ら／彼女らの表現もまた、「自己表現」と解釈し、作品の分析にあたることとする。

以上を踏まえ、本論文では以下の研究課題を設定する。

- ① 被差別部落当事者による自己表現を明らかにする。
- ② 被差別部落当事者による自己表現が部落解放運動とどのように関わるのかを明らかにする。
- ③ 被差別部落当事者による自己表現が公共性を獲得する可能性を示す。

第一部では部落解放運動のなかでさまざまな葛藤にさらされながら、ひたむきに表現活動の重要性を説いた土方鉄という一人の運動家・作家を研究対象として、彼の創作における自己表現について明らかにした。

第一章では、土方の創作の出発点である俳句と詩に関する分析を行った。彼の創作は結核療養に関する俳句から始まり、『土方鉄句集 よき日のために』（1954）を刊行した。それとともに終戦後の部落解放運動の再建・盛り上がりと呼応するように参入し、サークル文化運動にも参加していく。部落解放全国委員会群馬県連合会から出された『地ぞこからのうたごえ』（1952）に寄稿された彼の詩は当時の共産党綱領のアジテーションとして表現されることとなるが、それは彼自身の体験や経験に即した表現とは異なる表現であったと言える。

俳句と詩の比較検討から、自身の療養に関することや、自らの生きてきた部落、目にしてきた部落の人々を詠む主体と、当時の反戦平和運動の力学に翻弄される主体という揺れが浮き彫りとなる。こうした表現の揺れは、1950年代前半という複雑な社会状況の中で、自身の問題意識にある表現と運動の要請する表現とが入り混じり、それらを整理しきれない土方の姿が浮かび上がった。

第二章では、俳句や詩といった短い形式では表現しきれないという思い、そして『破戒』を超える作品を書きたい、書かねばならないという思いから、韻文から散文へと創作の場を変えた土方の代表作と言える小説「地下茎」（1961）を研究対象とし、そこで描き出される部落の人々の〈歪み〉を明らかにした。それまでの部落問題を扱った小説が、部落の人々を誇張した人物像として描かれてきたこと、あるいは部落の人々の肯定的な側面のみを描き出すことに注力されてきたことに批判的な態度をとる土方は、否定的な部落の人物像を描出していった。

そうした人物像を描き出すために、彼は作品連載中に語り手をどのように設定するのかを模索し、「語りの実験」を行っていった。その末に彼が獲得したのは作中人物による一人称語りという文体であった。部落の人々の視点から部落や差別をいかに眼差すかという点が常に問題意識にあった彼が獲得していったこの文体は、フォークナーの「意識の流れ」を駆使するための重要な手段であったと言える。

ただし、ここで留意すべきなのは、彼が獲得した文体が重要なのではなく、彼の「語りの実験」の過程にこそ、光を当てる必要がある、ということである。この過程において土方は語り手という存在をどのように配置するのかを最大の問題としていた。それはつまり、部落の人々、そして部落に生まれ育った自己をいかに表現として導出するのかという問いと重なり合う。そのとき突き当たるのは他者から見られる自己をどのように表現するのかという問題である。「地下茎」で描かれる部落の〈歪み〉は母のお牧を象徴として描き出されているが、その母を眼差す息子や娘の視点、そして、母が眼差す息子や娘の視点を表現する必要があった。初出連載時の「語りの実験」はそうした語り手の複数性を示そうとした、あるいは結果として示してしまったものとして捉えることができ、そこにこそ土方にとっての「地下茎」という作品の重要さがあると言える。

第三章では、小説から戯曲へと創作の場を移した土方の創作「殻をぬいだでんでん虫」(1967)と「闇にただよう顔」(1969)を分析対象とし、彼の描き出そうとした部落の表現と運動から求められる表現について明らかにした。一作目の「殻をぬいだでんでん虫」では「蒸発」をテーマとしながらもその裏テーマとしての「部落」という主題が表現手法や場の設定などから浮かび上がることを論じた。1960年代後半の社会現象として大きく注目されていた「人間蒸発」という点にスポットを当てながらも、そこに能や狂言といった伝統芸能や「鴨川」というモチーフを織り交ぜることによって、観る側にとっては「部落」を想起させる意図がそこには働いていたと言える。さらに、「老婆」によって象徴的に語られる「鴨川」が、本作品では最終的に行政、つまり政治権力の美化政策によって排除されること意味に目を向けると、同時代的な「共同体の崩壊」という問題が浮かび上がってくる。一九六五年に同和対策審議会答申が出され、部落解放運動の高揚期にあたるこの時期、急速に進められていく住環境の整備によって、部落の人々はもともと住居から団地やアパートに移り住むようになり、それまでの家と家とのつながりが解体されていった。「殻をぬいだでんでん虫」では、そうした問題をも含み込みながら土方の当時の部落に対する問題意識を如実に反映した作品として描かれたと言える。

一方で、第二作目の「闇にただよう顔」では、狭山裁判を題材とし、舞台を法廷として設定し、裁判記録に基づくような問答が行われている。そのため、「部落」というテーマが前面に押し出されるとともに、狭山事件のあらましや、裁判での司法権力の不当さを訴えかけるような表現が多くなされている。それは、満を持して部落を主題とした戯曲を作る土方の意欲的な表現であると同時に部落解放運動が求める表現であったともいえる。ただし、土方はここでも自己の問題意識を反映させるかのように、第一作目で登場させた「老婆」の設定を引き続き踏襲しながら裁判記録にはない創作の部分を描き出そうとした。しかし、それが第一作目よりも効果的に働いてはいないと言える。土方自身そうした創作の部分に力を入れたことを述べてはいるが、それと同時に運動側から求められる表現と自己が描き出したい表現との間で葛藤を抱えていたことが語られている。そうした葛藤は土方自身の言だけでなく、作品の表現からも見いだすことができる。

第四章では、土方の実体験に基づいて書かれた詩「病床断片Ⅰ・Ⅱ」(1982)および小説「妣の闇」(1990)を分析対象とし、彼にとって「書くこと」とはどのような営みであったのかを明らかにした。これらの作品は甲状腺全摘、声帯の神経一部摘出、右リンパ腺摘出、気管切開という大手術を受けることとなった療養の体験が執筆の経緯となっている。10代の頃から結核を患い、病と隣り合わせだった土方にとって、生と死という問題は非常に大きな問題関心であったと言える。さらに、これらの作品の土台には療養中に土方がつけていた日記の存在が明らかになっており、日記をつける→詩を書く→小説を書くという創作の段階があった。「妣の闇」では、こうした療養している自分と日記をつけているときの自分、そして現在の自分を語り手ベースで書き分けており、そこには繰り返し自己を再構成し、生成していく過程が読み取ることができる。

また、作品では病に関する記述だけではなく、一九八〇年代当時の部落解放運動で巻き起こっていた北九州土地ころがし事件などの汚職事件などに関する新聞記事の挿入やそれに対する語り手の悲嘆が描かれている。病と向き合い、自己と向き合うなかで土方にとってやはり部落解放運動が大きな位置を占めていたことは想像に難くない。病と向き合う自己や運動の腐敗を嘆く自己といったさまざまな自己を表現していった本作品からは土方にとって「書くこと」というのはある種の「使命感」として認識されていたと言える。

第二部では、被差別部落当事者の中でもとりわけ女性たちに焦点を当て、一九五〇年代から一九七〇年代までの時期において彼女たちが部落解放運動内部でどのような立ち位置にあったのか、そして彼女たちの創作においてどのような自己表現が見いだせるのかについて分析した。

第五章では、一九五〇年代の部落女性が部落解放運動でどのように捉えられていたのか、そして当時高校生だった重岡洋子、および群馬県の主婦岡田ます枝らの表現の可能性を明らかにした。一九五〇年代における部落解放運動では、女性差別の撤廃や家庭内の民主化をかかげながらも、男性を中心とした男性優位の思想が根底に残り、その中に女性を位置づけるという矛盾があった。そうした中で、雑誌『部落』の誌面上では、部落女性による小説や詩などの創作が掲載されており、とりわけ注目されたのが、重岡洋子による小説「日蔭」であった。当時の『部落』誌で女性による創作に対するリアクションがあったのは本作品のみであり、掲載後に男性三名、女性一名による批評が寄せられた小特集が組まれた。この小特集における「日蔭」へのコメントが男性と女性ではっきりと分かれる点に注目する。男性批評家三名からは、作品内容は未熟なものの、部落の女性がこうした小説を「書くこと」自体を肯定的に評価した。それに対して、唯一女性の立場から批評した岡田ます枝は、本作品の結末部において、部落解放は「日本民族の解放より外ない」という当時の共産党綱領のアジテーション的な表現を真っ向から否定し、作中人物である部落出身の女子高生の「家庭の状態が全然わからず」、「恵まれ過ぎた高校生」として描かれていることに、違和感を示した。

岡田は群馬勤労者集団というサークルに所属していたサークル詩人であり、彼女の代表詩「重たいふとん」は土方も詩を寄稿していた『地ぞこからのうたごえ』に掲載され、『部落』誌にも転載されることとなった。それらの詩作からは党派的、政治的言説にからめとられることなく、自らの環境や生き方から自然に表現された部落女性像が読み取ることができる。

さらに、岡田の詩が掲載された『地ぞこからのうたごえ』には多くの部落女性の詩が掲載されているのが特徴的で、なかでも中学三年女児の泉君子による「けんか」では、一見父親による家族への暴力、すなわち加害者としての側面が語られているように読み取れるが、その父親もまた、部落に生まれたことによって差別された被害者としての側面もあったことを表現している。泉が提示した加害の可能性を持つ者が被る、被害への視点は、当時の部落解放運動を取り巻くジェンダー体制を相対化する可能性、すなわち「虐げる男性／虐げられる女性」という対立構造にも揺らぎを与える可能性を持っていたと言える。

第六章では、一九五九年一月に雑誌『部落』で連載が始まった住井すゑの『橋のない川』と、同時期に毎月のように『部落』に詩が掲載されていた下原温子の表現を分析対象とし、六〇年代における部落問題を主題とした文学作品に描きだされた被差別部落女性像と、被差別部落女性自身が表現した部落女性像の差異を明らかにした。

『橋のない川』は一九九〇年まで書き継がれ、累計約八〇〇万部のベストセラーとなった。しかし、近年の研究で『橋のない川』で描かれる部落女性たちは、男性中心主義的眼差しによって描かれており、ジェンダー規範を内面化しているという批判や、作中の時代設定が一九二〇年代であるにも関わらず、作品執筆当時の一九六〇年代の言説が反映されているという批判も出てきた。

論者自身もそうした批判に同意するが、『橋のない川』をテキスト分析のみによって批判するだけでは不十分であるという考えから、当時の住井を取り巻くコンテクストとしての部落解放運動や部落女性自身の表現との関係性を明らかにした。

そこで注目したのが、山口県のサークル「駱駝」に所属していた下原温子である。下原の詩はサークル誌『駱駝』から『部落』へと度々転載され、多くの読者がいたにもかかわらず、その表現が取り上げられることはこれまでなかった。下原は部落解放運動とは一定の距離を置きながら、同人で先に部落に関する表現活動をしていた丸岡忠雄に影響を受け、彼女自身の恋愛や結婚、家庭に関する詩を表現していった。彼女が描き出す部落女性像は常に男性視点を内面化してしまう女性像なのであるが、そこには運動の言説では登場しない、自身の出自に関して語りたくても語ることのできない部落女性という立ち位置があった。こうした男性視点の内面化を受けた部落女性像が下原によって表現される一方で、『橋のない川』では部落男性である誠太郎の視点から部落出身であることをことさらに露悪的に否定するという屈折の中に、被差別部落女性があることが表現されていた。下原の表現を読み解くことによって、そうした当時の部落の人々の中にあるジェンダー規範の内面化の問題がくっきりと浮かび上がるのである。『橋のない川』の部落女性像や運動に参画していた女性たちの声といった一面的な部落女性像を相対化する表現として下原の詩は位置づけられるだろう。

第七章では、一九七〇年代の部落女性の表現として、識字学級に通っていた部落女性たちが創作した詩を分析対象とし、これまでの研究では識字運動によって文字を獲得した部落女性が多く作品を世に送り出した、という「数」としての評価がほとんどであったことを踏まえ、部落女性たちのひとつひとつの詩の表現をじっくりと読み解き、その可能性について明らかにした。

一九七〇年代に入り、部落女性たちは部落解放運動に積極的に参入していくようになり、それまで差別の経験や感情を沈黙させられてきた彼女たちは、部落解放全国婦人(女性)集会で声を発するようになっていった。こうした部落女性たちの声は討議資料や大会の記録などからひろいあげることができ、彼女たちの主張からは部落男性を加害者、部落女性を被害者といった二項対立的な語りを強調するものが多くを占めていた。しかし、本章で対象と

する識字学級に所属していた阪本ニシ子・みずた志げこの詩には、部落男性たちもまた、差別によって虐げられてきたのであり、それを妻や娘といった部落女性が語るといった加害と被害という単純な二項対立の図式を崩すような表現を見出すことができる。運動の言説や「記録」からでは読み取ることのできない部落女性の抱えていた複雑な状況が、阪本やみずたの詩からは浮かび上がってくる。

第三部では、「公共性」という鍵概念を手掛かりに部落解放運動における文化活動の運動がどのように位置づけられるのかについて明らかにした。アジア・太平洋戦争を経て、いち早く再建にのりだした部落解放運動は、それまで当然のように残っていた部落差別の不当さを世に問い直そうとし、国家を巻き込むほどの盛り上がりを見せる。それは部落解放運動そのものがそれまでの日本社会における公共性を問い直す営みであったことを指し示している。しかし、部落解放運動は一枚岩的な組織ではなく、一九六〇年代後半頃になると、特に日本共産党との関係が悪化し、組織は分裂状態になっていく。そうした複雑なイデオロギーの対立がある中で、部落の文化活動もまたその影響を受けていた。運動にとって有用な文学が求められる状況下でも、部落の人々の表現の場の創出することを土方らは模索していく。その営みには、部落解放運動という公共空間の中において、部落の文化活動という新たな公共空間を生み出していこうとする意図があったと言える。この点に関して詳述する。

第八章では、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、部落解放運動が盛り上がりを見せながらも政治的な分裂を起こしていく混乱のなかで、文学や文化活動がどのように捉えられていったのかについて整理する。この時期の文学や文化活動の言説は、常に政治的なスタンスが問われながら述べられたものが多く、そうした政治的対立などを客観的に整理されることはほとんどなかったと言える。このことについて、本章では、運動の分裂を客観的に整理したうえで、そこでの文学や文化活動がどのように位置づけられるのかを検討した。

第九章では、一九七五年に野間宏を議長にして結成された「差別とたたかう文化会議」の機関誌『差別とたたかう文化』および、部落解放運動における文化活動の推進に大きな役割を果たした土方鉄を中心に発刊された文芸季刊誌（現在は文芸誌）『革』の運動に焦点を当てた。そこで、「公共性」やアメリカの政治学者ナンシー・フレイザーが提唱した「ニーズ解釈の政治」という理論的な枠組みを援用し、その枠組みで部落解放運動を捉えることによって、これまでの部落解放運動史から零れ落ちてきた部落解放運動をめぐる文化活動の重要性や可能性を明らかにした。

部落解放運動における文化活動は一九七〇年代に最盛期を迎えるが、当時の運動主流派にとって文化活動はほとんど重要視されず、運動の役に立つ手段として捉えられていた。しかし、野間や土方をはじめとする文化活動推進者は部落問題や差別を文学・文化によって世に広く問おうとした。それに呼応するかのようになり、多くの作家や活動家が彼らに賛同することとなり、文芸誌『革』は現在でもその活動を継続させている。部落問題を運動という場だけでなく文学・文化という場で問い直そうとするニーズがあり、その新たなニーズを創り出そうとする運動があった。歴史に埋もれてきた彼らの軌跡の重要性と部落問題を新たな

形で問い直そうとする可能性を明らかにした。

結章では、本研究のまとめとして、研究課題と各部との関連性について論じた。

本章第一節で概観したように、第一部では土方鉄に焦点を当てて、彼の表現活動を通史的に捉えた。土方の辿ってきた創作活動を振り返ると、部落解放運動とのせめぎあいの中で、いかに自己の求める表現をしていくかという葛藤を常に抱えていたと言える。また、こうした葛藤には、運動との関わりだけではなく、自己の表現をどのように他者に読ませるか、つまり読み手への意識も働いていた。一九七五年にひらかれた部落の書き手たちによる座談会で司会を務めた土方は「われわれが書くものが、部落の高校生やおっちゃんおばちゃんが読んでわかってくれるというか、感動してくれるというのか、そういうふうな問題が一人の作家のなかで矛盾し、常にぼくのぼあいは悩みになっていくわけだけれど、そこらあたりはあんまり考えてないですかね」<sup>3</sup>と問いかけた。この問いかけに対して、参加者の山口公博は土方の作品の受け止められ方について「土方さんの作品を今、部落の中でどれだけの人が理解するかといえば、まあ数少ないと思うんですね。それよりも、理解するかどうかやなしに理解しようと試みる人が圧倒的に少ないですね。例えば土方さんが、どんな小説かいてるかというのは、今の部落のなかではもんだいにされてないと思うんですね。ただ土方鉄という部落民が、小説かいてるんや、小説家というエライ人がおるんや、とそういう形でしかうけとめられへんというのが現実でしょ<sup>4</sup>」と述べている。

この座談会では、土方の世代よりも二〇年ほどのちに生まれた書き手たちが参加者として集められており、彼らの創作を土方が後押しするというような趣旨の発言も後半で見ることができる。このように、自分自身が抱えてきた部落の書き手としての葛藤を後の世代の部落の書き手たちと共有しあい、部落の書き手として孤軍奮闘する土方の背中見ながら、後続の書き手たちは表現活動に取り組んでいたことが分かる。部落に生まれ育ったがゆえに「書くこと」とは距離があることを承知しながらも、表現活動の重要性を訴え続けてきた土方の取り組みは、運動内部における被差別部落当事者による文学活動の公共的な空間を生み出そうとした運動として位置づけられるのではないだろうか。

第二部では、第五章では岡田ます枝、第六章では下原温子、第七章では阪本ニシ子・みずた志げこといった部落女性たちの表現を分析した。彼女たちに共通する表現の特徴として挙げられるのは、創作当時の部落解放運動の言説や部落に対する外部の認識とは異なる部落女性としての自己表現がなされていることである。岡田の表現は、部落に生まれことによる貧しさや差別の厳しさをありのままに表現することで、運動内部では不可視化されてきた部落女性のあり様を浮かび上がらせた。下原の表現からは、男性たちからの視線を内面化させながら、部落出身である自己を表現することに対する強烈な葛藤を抱きつつも、それでもなお表現せねばならないという覚悟が読み取れる。それは、運動内部では男性運動家たち

---

<sup>3</sup> 山口公博・大谷正明・黒木晃・(司会) 土方鉄 (1975) 「差別と文学・文化〔11〕文学創造の課題」『部落解放』75号における土方の発言 94頁

<sup>4</sup> 同上、山口の発言 95頁

の女性差別に対する不満を述べたり、女性の運動参加への要請をしたりするなど、運動に参加していた部落女性たちが主体性を形成していく様とは異なるあり方を示していた。また、阪本やみずたらの表現からは、生活の中で「書く」という行為によって、自分自身を表現したり、自己との向き合い方をとらえたりしようとするのが重要な問題意識があったことが読み取れ、それは運動側が女性たちに部落差別についての認識の優先や部落民という立場の優先という「語りの型」とは異なる部落女性の声の表明があったことを指示している。

彼女たちの表現は、一見すると何の変哲もない部落女性としての自己表現であるかのようにも読み取れる。だからこそ、今日まで議論の俎上に載せられることなく、評価されることもなかったと言える。しかし、彼女たちの表現からは運動の言説とは異なるあり方で部落女性の多様性を表現しているとともに、それは運動とは異なる場で部落女性による表現の場という公共的な空間を創出していこうとする萌芽的な営みであったと言えるのではないだろうか。第一部で取り上げた土方は、はやくから阪本やみずたらのような識字学級に通う部落女性たちの表現の可能性を指摘しており、「部落解放文学賞」識字部門・記録部門の選考委員として、長らくの選考を務めていた。その際、識字と表現の問題に関して、土方は「識字でそういう（＝自己の体験：論者注）話を書くときにね。おばちゃんやおっちゃんが底のやぶれたズックぐつをはいてた時に道のあるいた時にどういうふう感じたか。どのように痛かったかというようなところまで書いてもらうように指導していかんと、文学につながっていかないと思う。そこのところが大事と思う。その時にどういう痛みを足のウラに感じたか、とかパーと自転車を押した時に手にどんな反応があって、自分心ココロのなかにどういう感情がわきあがってきたかとかね<sup>5</sup>」と述べている。

ここには、字を学んだことや字を学んだことで生活が豊かになったことを指導員への感謝として表現するのではなく、部落に生まれ育った自己の体験をありのままに表現することによって、文学へと成り立っていくという土方の識字作品に対する文学観が表明されている。ここでは、識字運動内部における公共性の問い直し、識字学級に通う部落の人々の自己表現によって可能となるのではないか、という思いも込められているように思われる。

こうした土方の運動における文学・文化活動の推進は第三部で述べるように、文芸誌『革』の創刊へとつながっていく。住環境の整備や国策の樹立といった実生活面での運動の必要性が叫ばれ、「書くこと」、表現することは二の次、三の次だと捉えられていた当時の状況下で、文芸誌『革』は部落の書き手たちにとって重要な場であったと言える。また、『革』には識字学級で創作された部落女性たちの創作が掲載されるなど、「書くこと」によって部落と向き合おうとする人々の大きなよりどころとなっていく。表現活動の重要性を主張し続けてきた土方を含める『革』のメンバーの文学活動は現在も継続して行われている。部落解放運動それ自体が公共性を問い直す運動であるが、彼らの営みは、部落解放運動内部における公共性を問い直し、新たな公共的な空間を生み出していこうとする運動であったと言

---

<sup>5</sup> 注3に同じ、99頁

えるのである。

## 【参考引用文献】

### 序章

- ・梅沢利彦・山岸嵩・平野栄久（1982・1984）『文学の中の被差別部落像』戦前編・戦後編、明治書店
- ・北川鉄夫（1984）「近代の部落問題と文芸」部落問題研究所編『部落史の研究 近代編』
- ・北原泰作（1959）「日本近代文学に現われた部落問題」『文學』27号
- ・木村毅（1926）『文芸東西南北』新潮社
- ・黒川みどり（1999）『異化と同化の間 被差別部落の軌跡』青木書店
- ・黒川みどり（2016）『創られた「人種」——部落差別と人種主義——』有志舎
- ・住田利夫（2002）『部落問題文芸素描』南斗書房
- ・宋恵媛（2014）『「在日朝鮮人文学史」のために：声なき声のポリフォニー』岩波書店
- ・友常勉（2012）『戦後部落解放運動史 永続革命の行方』河出書房
- ・秦重雄（2011）『挑発ある文学史：誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』かもがわ出版
- ・藤範晃（1929）「部落解放問題と文芸」『融和事業研究』第3輯
- ・村上陽子（2015）『出来事の残響』インパクト出版社
- ・師岡佑行（1980~1985）『戦後部落解放論争史』全5巻 柘植書房
- ・渡辺直己（1994）『日本近代文学と〈差別〉』太田出版
- ・渡辺巳三郎（1993）『近代文学と被差別部落』明石書店

### 第一部 第一章

- ・全国部落解放委員会群馬県連合会（1952）『地ぞこからのうたごえ』
- ・荒井裕樹（2009）『「療養文芸」への試論——サークル文学運動への一視点として——』『日本近代文学』第81集
- ・石田波郷（1987）『石田波郷全集 第一巻 俳句Ⅰ』富士見書房
- ・石田波郷（1987）『石田波郷全集 第二巻 俳句Ⅱ』富士見書房
- ・五十崎朗（1994）『「借命」』『俳句』
- ・井之川巨編（1975）『鋼鉄の火花は散らない——江島寛・高島青鐘の詩と思想』社会評論社
- ・宇野田尚哉、川口隆行、坂口博、鳥羽耕史、中谷いずみ、道場親信編（2016）『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』影書房
- ・川口隆行『「われらの詩」と朝鮮戦争』（2014）『大阪大学日本学報』第三三号
- ・キムジョンミ（1994）『水平運動史研究—民族差別批判—』現代企画室
- ・黒川伊織（2014）「一九五〇年代のサークル詩活動と部落民の表現」—酒井真右と部落解放詩集『地ぞこからのうたごえ』—『京都部落問題研究資料センター通信』
- ・神野紗希（2011）「まだ見ぬ俳句へ 高柳重信の多行俳句」『ユリイカ』
- ・国分一太郎（1954）「風に鳴る樹々」『列島』9号
- ・酒井弘司（1988）「初学時代に出会った句」『俳句』37巻6号
- ・瀬木慎一（1953）「明日へ生きるもの——闘病者の文芸作品——」『新日本文学』8巻10号
- ・妹尾健（1985）「現代俳句と表記について——黙示的世界へ——」『俳句研究』
- ・高見順編（1950）『眠られぬ夜のために：療友に贈る書』四季社
- ・筑紫磐井（2019）「現代俳句の道筋——社会性俳句を軸として——」『現代俳句』642号
- ・坪井秀人（2005）『戦争の記憶をさかのぼる』筑摩書房

- ・寺木伸明・黒川みどり（2016）『入門 被差別部落の歴史』解放出版社
- ・鳥羽耕史（2010）『一九五〇年代—「記録」の時代—』河出ブックス
- ・鳥羽耕史（2006）「サークル誌ネットワークの可能性—『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガ  
リ版文化—』『昭和文学研究』
- ・夏石番矢（1984）「富澤赤黄男の空白」『俳句研究』
- ・野間宏・安東次男・瀬木慎一編（1954）『風に鳴る樹々 全国結核療養者詩集』朝日書房
- ・長谷川權（1994）「夜の風鈴——石田波郷論——」『俳句』43 卷 10 号
- ・土方鉄（1987）『解放文学の土壌』解放出版社
- ・土方鉄（1999）「六百号に当たっての私的な回顧」『新日本文学』
- ・土方鉄（2001）『小説 石田波郷』解放出版社
- ・松本國雄編（1951）『光ほのかに 第三 眠られぬ夜のために』四季社
- ・三好達治編（1951）『続眠られぬ夜のために』四季社
- ・連盟創立五〇周年記念事業委員会編（1996）『新俳句人連盟五〇年 歴史と作品』

## 第一部 第二章

- ・井上ひさし・筒井康隆（1988）『ユートピア探し 物語探し—文学の未来に向けて』岩波書店
- ・井上隆史（2015）『三島由紀夫『豊饒の海』VS 野間宏『青年の環』—戦後文学と全体小説』新典社
- ・岡和田晃（2020）「〈世界内戦〉下の文芸時評 第七〇回」（『図書新聞』3475 号
- ・小田切英雄・井上光晴・金達寿・野間宏・阿部知二（1963）「現実をいかにとらえるか——長編小説  
の方法——」『新日本文学』
- ・野間宏（1965）「部落解放運動のなかの文学の前進」『部落』
- ・野間宏・大江健三郎（1971）『『青年の環』と全体小説』『文藝』
- ・野間宏（1983）『青年の環（一）』岩波書店
- ・土方鉄・高田英太郎（1963）『地下茎／黒い原点』三一書房
- ・土方鉄（1971）「田口吉喜のイメージ」『新日本文学』26 卷 8 号
- ・浜田泰三（1964）「方法についての覚え書——『地下茎』と『黒い原点』をめぐる』『新日本文学』
- ・日野範之（2004）「風もなく蘆原さわぎ世界病む——土方鉄作品論」『新日本文学』
- ・山岸嵩（1982）「解放文学への期待」『文学の中の被差別部落像 戦後篇』明石書店
- ・「第二回新日本文学賞選考結果発表」（1962）『新日本文学』

## 第一部 第三章

- ・網野善彦（1997）『日本社会の歴史（上）』岩波新書
- ・宇津木秀甫（1964）「関西新劇の情況と当面の課題をさぐる」『テアトロ』
- ・梅山いつき（2012）『アングラ演劇論 叛乱する言葉、偽りの肉体、運動する躰』作品社
- ・キアラ・コマストリ（2014）「被爆体験を〈書く〉——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』  
を中心に——」『原爆文学研究』13 号
- ・清水三郎（1967）「『ヴェニス商人』の演出に注目—関西の新劇—くるみ座・京都小劇場・プロメテ・  
明日」『テアトロ』
- ・篠田正浩（2009）『河原者ノススメ』幻戯書房
- ・扇田昭彦（2012）「六〇年代演劇の軌跡と影響」岡室美奈子・梅山いつき編『六〇年代演劇再考』水声

社

- ・仙波希望 (2016) 「「平和都市」の「原爆スラム」―戦後広島復興期における相生通りの生成と消滅に着目して―」『日本社会学会年報』34号
- ・中川登美子 (2016) 「日本における「不条理劇」受容の一断面―冥の会『ゴドーを待ちながら』をめぐって―」大阪大学文学部演劇学研究室『演劇学論叢』
- ・中森弘樹 (2013) 「1950-1980年代の失踪表象と親密圏の変容―「家出」と「蒸発」の雑誌記事分析を中心に―」『ソシオロゴス』
- ・那須宗一[他]編 (1978) 『家族病理学講座 3 家族病理と逸脱行動』誠信書房
- ・西堂行人 (2016) 「東京の小劇場は実験的であり続けているのか？」『悲劇喜劇』
- ・『野間宏全集第一〇巻 戦後文学の圏域』(1987) 岩波書店
- ・土方鉄・蟻圭介 (1970) 「対談 部落解放と演劇」『部落解放』
- ・藤木宏幸 (1962) 「演劇活動と部落問題 ―東京での新劇活動を中心として―」(『部落』14巻4号)
- ・水内俊雄 (2005) 「マイノリティ／周縁からみた戦後大阪の空間と社会」(『日本都市社会が学会年報』23号)
- ・村田拓 (1975) 「部落解放運動における演劇運動―中川鉄太郎「濡衣秘録・寛政五人衆」の上演活動に参加して(天皇・部落・国家〈特集〉)」『新日本文学』
- ・村田拓 (1976) 「解放運動が作り出した大衆演劇―「濡衣秘録・寛政五人衆」の場合(部落解放運動と文化運動)」『新日本文学』
- ・山岸崇 (1980) 「水平社運動が生んだ文学―西光万吉の戯曲を中心に―」梅沢利彦 平野栄久 山岸崇編『文学の中の被差別部落像 戦前篇』明石書店
- ・山代巴 (1965) 『この世界の片隅で』岩波書店
- ・「部落解放の演劇活動の流れ」(1987)『部落解放』
- ・『野間宏全集第一〇巻戦後文学の圏域』岩波書店
- ・『能楽用語辞典』、[http://db2.the-noh.com/jdic/2008/07/post\\_27.html](http://db2.the-noh.com/jdic/2008/07/post_27.html)
- ・『能・狂言の基礎知識』(2009) 角川学芸出版
- ・『狂言記 新日本文学大系 53』(1996) 岩波書店
- ・『能楽大事典』(2012) 筑摩書房
- ・部落解放・人権研究所編 (2001) 『部落問題・人権事典』解放出版社

#### 第一部 第四章

- ・川口恭一・岡本靖正編 (1998) 『最新 文学批評用語辞典』研究社出版
- ・安藤宏 (1996) 「日記体小説をめぐって―太宰治『正義と微笑』を視点に―」『国文学解釈と教材の研究』
- ・遠藤由美 (2000) 「過去記憶と日記、そして自己」『現代のエスプリ』
- ・直原弘道 (2006) 「土方鉄と現代俳句」『部落解放』
- ・堤重久 (1962) 『『正義と微笑』の背景』『定本太宰治全集第五巻、月報』筑摩書房
- ・葉山郁生 (1994) 「土方鉄とマイナー文学」『新日本文学』
- ・土方鉄 (1990) 『妣の闇 土方鉄小説集』解放出版社
- ・日野範之 (2004) 「風もなく蘆原さわぎ世界病む―土方鉄作品論」『新日本文学』
- ・萬所志保 (2009) 「太宰治における日記体小説―『正義と微笑』をめぐって―」『文学・語学』
- ・山口直孝 (2009) 「内面の卓越化から凡庸化へ―近代日記体小説をめぐる覚書」『日本近代文学』

## 第二部 第五章

- ・部落解放研究所編（1980）『部落解放運動基礎資料集第Ⅰ巻全国大会運動方針第1～20回』解放出版社
- ・「青年と解放運動について——座談會——」（1949）『部落』
- ・大江健三郎（1995）『あいまいな日本の私』岩波書店
- ・岡田マキ（1949）「新方針と部落婦人の役割」『部落』
- ・岡田ます枝（1953）「同じ悲しみを持ちて」『部落』
- ・北端利子（1952a）「女性を尊重してほしい」『部落』
- ・北端利子（1952b）「農村の嫁はかなし」『部落』
- ・黒川伊織（2010）「サークル詩運動とジェンダー——李静子の作品を読む」ヂンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動——幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』人文書院
- ・黒川みどり・藤野豊編（2009）『近現代部落史 再編される差別の構造』有志舎
- ・小林綾（1962）『部落の女医』岩波書店
- ・重岡洋子（1953）「日蔭」『部落』
- ・辻五郎（1953）「解放文學の芽生え」『部落』
- ・熊本理抄（2020）『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』解放出版社
- ・酒井真右（1953）「重岡洋子「日蔭」について」『部落』
- ・秦重雄（2011）「戦後部落問題文芸と研究の到達点」部落問題研究所編『部落問題解決過程の研究 第2巻（教育・思想文化篇）』部落問題研究所出版部
- ・濱口亜紀（2011）「部落解放全国婦人集会開催とその意義——第一回、第二回を中心に——」『大阪人権博物館紀要』
- ・土方鉄（1953）「日蔭から踏み出よう」『部落』
- ・部落解放全国委員会（1954）「『破戒』初版本復原に関する聲明」『部落』
- ・眞下五一（1953）「日蔭を日向に」『部落』

## 第二部 第六章

- ・磯村英樹（1970）「駱駝の女性詩人たち」（『駱駝』101号）
- ・小川和生（1970）「五本目の指のために 詩集『部落』を読んで」（『駱駝』120号）
- ・加賀谷真澄（2009）「『橋のない川』における内地在住朝鮮半島出身者——戦後の再構築としての被差別部落民との共闘関係」（『文学研究論集』、27号）
- ・鬼頭七美（2001）「住井すゑと『橋のない川』にみる性差別——その女性描写をめぐって」（『社会文学』53号）
- ・木村京太郎（1973）『水平社運動の思い出 下』部落問題研究所
- ・熊本理抄（2020）『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』解放出版社
- ・下原温子（1959）「五本目の指を」『駱駝』第66号
- ・下原温子（1960）「寝言」『駱駝』69号
- ・下原温子（1965）「部落誌」『駱駝』97号
- ・住井すゑ（1981）『橋のない川（一）』新潮社

- ・住井すゑ (1981) 『橋のない川 (三)』新潮社
- ・住井すゑ・小原元 (1965) 「人間・差別・文学」『現実と文学』43号
- ・坪井秀人 (2020) 『二十世紀日本語詩を思い出す』思潮社
- ・谷口修太郎 (1961) 「生活要求から文学へ——われわれの文学を創造しよう——」『部落』
- ・真壁仁 (1966) 『詩の中にめざめる日本』岩波新書
- ・真原牧・丸岡忠雄 (1969) 『部落—五本目の指を—』駱駝社
- ・野村喬 (1962) 『『橋のない川』について』『文化評論』11号
- ・秦重雄 (2008) 『『橋のない川』の巨大な役割——部落問題解決過程に果たしたもの——』『部落問題研究』185号
- ・秦重雄 (2011) 「戦後部落問題文芸と研究の到達点」部落問題研究所編『部落問題解決過程の研究 第2巻 教育・思想文化篇』部落問題研究所出版部
- ・福永正己 (1959) 「差別をこえるもの—64号高州、66号五本目の指—をめぐって」『駱駝』66号
- ・前田ひさ (1961) 「六年の歳月の重み——第六回部落解放婦人集会に参加して——」『部落』13巻2号
- ・丸岡忠雄 (1959) 「指」『駱駝』64号
- ・山田新市 (1965) 『『橋のない川』の青年像について二、三』『文化評論』39号

## 第二部 第七章

- ・朝治武 (2014) 「水平運小津における女性、少年少女が果たした役割——婦人水平社、少年少女水平社90年にあたって」『部落解放』688号
- ・朝治武 (2018) 『水平社闘争の群像』解放出版社
- ・川向秀武 (1994) 「光り輝いた女たちの熱き想い——九州婦人水平社の光と陰」『部落解放』371号
- ・黒川美富子 (1970) 「婦人水平社研究試論」『部落問題研究』28号
- ・黒川みどり (1994) 「婦人水平社のあゆみと全国水平社」『部落解放』371号
- ・熊本理抄 (2003) 「部落解放運動とジェンダー」『部落解放』511号
- ・熊本理抄 (2020) 『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』解放出版社
- ・国分一太郎 (1976) 「なにが私にできるのか」『差別とたたかう文化』
- ・阪本ニシ子・広田静子 (1974) 「表をあむ」『部落解放』63号
- ・鈴木裕子 (1987) 『増補新版 水平線をめざす女たち——婦人水平社運動史』ドメス出版
- ・鈴木裕子 (1994) 「関東婦人水平社の女性たちとその解放思想」(『部落解放』371号)
- ・寺本知ほか (1981) 「うれしいこと、泣きたいこと、怒っていること…を、自分のことばで、すなおに書こう——『部落解放詩集・太陽もおれたちのものではないのか』完成記念・作者の座談会」(『部落解放』166号)
- ・東上高志編 (1973) 『新版 わたしゃそれでも生きてきた』部落問題研究所出版部
- ・日野範之 (1979) 『ジャムナ河の聲』境涯準備社
- ・日野範之 (1981) 「部落解放の文学」『部落解放』162号
- ・日野範之 (2017) 『『部落解放文学賞』が始まった頃』『部落解放』743号
- ・藤目ゆき (1994) 「女性解放運動からみた婦人水平社」『部落解放』371号
- ・みずた志げこ (1976) 「母の話から『おもたあ荷』」『部落解放』82号
- ・村田拓 (1977) 「被差別者の文学の可能性」『革』創刊号
- ・森実 (2012) 「しきじ・識自・識字」『部落解放』661号
- ・湯浅孝子 (1989) 「女性史からの視点」小林茂・秋定嘉和編『部落史研究ハンドブック』雄山閣出版

## 第三部 第八章

- ・大賀正行（1969）『『今日の部落問題』批判——日本共産党の思想的誤りの根源をつく——』『部落解放』第4号
- ・北川鉄夫（1969）「『橋のない川』をめぐって」『部落』
- ・黒川みどり（2011）『描かれた被差別部落—映画の中の自画像と他者像—』岩波書店
- ・齋藤純一（2000）『思考のフロンティア 公共性』岩波書店
- ・佐藤忠男（1973）「真情あふるる冤罪実話の映画化」『キネマ旬報』
- ・佐藤重臣（1974）「狭山の黒い雨」『映画評論』
- ・須賀晃一（2010）「第5章 市場が生み出す公共性——フェアな競争の場としての市場——」齋藤純一編『公共性の政治理論』、ナカニシヤ出版
- ・杉浦明平（1962）「部落問題と戦後の文学」『部落』150号
- ・土方鉄（1992）「『橋のない川』再映画化に当たって——今井監督作品をなぜ批判するのか——」『シナリオ 橋のない川』解放出版社
- ・ひょうご部落解放・人権研究所「部落問題用語解説」（ひょうご部落解放・人権研究所 HP、<http://blrhyg.org/yogo/yogo.html#toitsu>、2022年1月10日最終閲覧）
- ・藤谷俊雄（1963）「『部落』誌一年間の批判」『部落』159号
- ・部落解放研究所編（1980）『部落解放運動基礎資料 第Ⅱ巻 全国大会運動方針 第21回～第29回』解放出版社
- ・森秀人（1963）「文学と非文学のあいだ——一九六二年の文学状況について——」『部落』159号
- ・師岡祐行（1980）『戦後部落解放論争史 第三巻』柘植書房
- ・師岡祐行（1984）『戦後部落解放論争史 第四巻』柘植書房
- ・用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会編（1975）『差別用語』汐文社
- ・Jurgen Habermas（1994）『第2版 公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、未来社

### 第三部 第九章

- ・しんぶん『赤旗』（2016・12・9）[http://www.jcp.or.jp/akahata/aik16/2016-12-09/2016120904\\_01\\_1.html](http://www.jcp.or.jp/akahata/aik16/2016-12-09/2016120904_01_1.html)
- ・衆議院HP「法律第六十号（1969・7・10）同和对策事業特別措置法」  
[https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_housei.nsf/html/houritsu/06119690710060.htm](https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/06119690710060.htm)
- ・川元祥一（1987）「差別問題を引きよせ登攀する場——文芸季刊誌『革』発刊によせて」（『新日本文学』33巻3号）
- ・齋藤純一（2000）『思考のフロンティア 公共性』岩波書店
- ・齋藤純一（2008）『政治と公共性 民主的な公共性にむけて』岩波書店
- ・須賀晃一（2020）「第5章 市場が生み出す公共性——フェアな競争の場としての市場——」齋藤純一編『公共性の政治理論』ナカニシヤ出版
- ・宋恵媛（2014）『『在日朝鮮人文学史』のために——声なき声のポリフォニー』岩波書店
- ・野間宏・竹内泰宏・土方鉄・村田拓・岡庭昇・川元祥一＝司会（1977）「座談会 差別を照射する文学」

#### 『革』創刊号

- ・藤井達夫（2010）「第三章 近代デモクラシーの理念と公共性」齋藤純一編『公共性の政治理論』ナカニシヤ出版
- ・部落解放研究所編（1980）『部落解放運動基礎資料 第Ⅱ巻 全国大会運動方針 第21回～第29回』解放出版社
- ・部落解放研究所編（1980）『部落解放運動基礎資料 第Ⅲ巻 全国大会運動方針 第30回～第35回』解放出版社
- ・Hannah Arendt（1994）『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房
- ・Jurgen Habermas（1994）『第2版 公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、未来社
- ・Nancy Fraser（1989）『Unruly Practices: Power, Discourse, and Gender in Contemporary Social Theory』University of Minnesota Press
- ・Nancy Fraser（1999）「公共圏の再考：既成の民主主義の批判のために」山本哲・新田滋訳、未来社
- ・Nancy Fraser（2012）『再配分か承認か？ 政治・哲学論争』加藤泰史監訳、高畑祐人・菊池夏野・船場保之・中村修一・遠藤寿一・直江清隆訳、法政大学出版局

#### 結章

- ・直原弘道（2006）「土方鑑と現代俳句」『部落解放』561号
- ・野間宏・中上健次（1981）「作家と〈責任〉」『文藝』20巻11号